

## f-Campus がはじまった

学習院女子大学 教務部長 神田 典城

当女子大学では、前身の短期大学の頃から同じ学校法人内ということもあって、共学の学習院大学との間で既に長年にわたって単位互換制度を実施してきている。またその上で、四年制女子大学として発足した後、ちょうどf-Campusの発足する1年前から、ご近所の、早稲田大学との間にも単位互換制度を開始していた。いずれ劣らず学生の人気は高く、我々としても小規模な大学ゆえのままならない科目設置を少しでも補う道が開けたと、喜んでいただところだった。また他大学から熱心な学生を受け入れたことが、当大学の学生にもよい刺激となり、一説には他大学の学生の姿の見える授業では私語が減ったり、学生のマナーがよくなったというようなことも、まことしやかに囁かれている。

このように単位互換については十分な下地があったところへ起こったのが、五大学間交流の構想だった。もちろん大歓迎だったのは言うまでもない。しかしながら一抹の危惧があった。というのも、他の四つの大学に比べて当大学はあまりにも小規模であり、他

の大学に対して十分な科目提供ができないのは目に見えている。またその事務扱いのために当てることのできる職員の数にも限りがあり、他の四大学に伍していけるのだろうかというのが正直なところだった。けれども、実際に動き出してみると、他の大学の方々にはさまざまに暖かなご配慮をいただき、先の危惧はまったくの杞憂だった。

このようにしてスタートしたf-Campusは、手応えも上々だった。当大学の学生から希望者が殺到したことは言うまでもないが、他大学からの受講希望者もこちらの受け入れ枠を遥かに超える希望者があり、その所属大学の方で、登録者を絞り込まなければならなかったという。中には、提供していない演習などにも、何とか受講できないものかとの問い合わせもあったということで、ともかくも好調なスタートを切ったと言っていいと思う。

もちろん始まったばかりの機構であり、問題がないわけではない。全体的に言えば、大学ごとのシステムの違いという現実がある。例えば当大学は完

全半期制をとっているのですが、通年での単位処理ができないこと、あるいは評価の際に、合否等点数のランク付けが異なるので、いちいち変換しなければならないといったこと、また授業期間や試験日程の設定が各々異なるために、何かと不都合が生じる等々。何にしても新たな問題が生じるたびにその対応に追われるという一年だったのは事実である。

しかしこういった問題は、個々の事例を積み重ねていくことで、遠からず安定した処理方法が確立するだろう。これから二年三年と f-Campus を進めていくことで、五大学にもたらされるであろう果実ははかりしれないものがある。当大学としてもこの機構をより発展的なものにするべく工夫を凝らしつつ、他の四つの大学とともに歩んでいきたい。